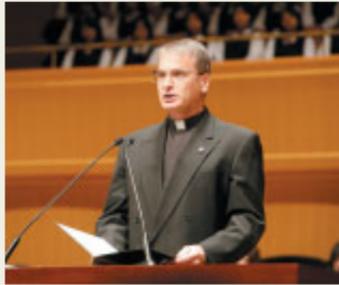


2007年は、南山学園が創立75周年を迎えるとともに、その設立母体である神言会が来日100周年を迎える記念すべき年である。この節目に、これまでの歩みに感謝し次の節目となる100周年に向けて前進する明確な方向性を確認すべく、75周年記念事業が開催された。また2008年4月には、記念事業の1つとして南山大学附属小学校(設置認可申請中)が開校する。



記念式典・コンサート



界を視野に入れた展望をもって「人を育てる」ことに励むという誓いを述べた。来賓としてご臨席いただいたローマ法王庁大使アルベルト・ポッターリ・デ・カステッロ大司教は、祝辞の中で、ローマ教皇庁が南山学園の初期の時代から積極的に援助をしてきたことを知り喜ばしく思ったこと、また、南山学園が青少年の教育に携わっていることを、カトリック教会は常に評価し感謝していると述べられた。

式典に続いて、テノール歌手井原義則氏(南山高等学校非常勤講師)、オルガニスト吉田文氏(南山大学エクステンションカレッジ講師)、同じくオルガニスト吉田徳子氏(南山短期大学教授)といった学園と深くかかわりのある方々の協力を賜わり、盛大に創立75周年記念コンサートが開催された。



2007年11月18日午前10時より、愛知県芸術劇場コンサートホールにおいて、創立75周年記念式典が行われた。歌劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第1幕への前奏曲(演奏:南山大学管弦楽団)で幕を開け、聖霊高等学校聖歌隊、Vox Angelica(南山短期大学聖歌隊)による聖歌、聖書朗読など、カトリックの荘厳な雰囲気の中で行われた。会場には、南山学園関係者をはじめ、カトリック学校関係者、愛知県をはじめとした近隣県学校関係者など、約1,500名の方々にご列席いただいた。ミカエル・カルマノ理事長は式辞の中で、記念式典にご参列いただいたことのお礼を述べるとともに、南山学園が、創始者であるライネルス神父が抱いた「キリストの教えは人間教育をより豊かなものにするという確信」の中でその歴史が始まったこと、そして、南山大学の初代学長を務めたアロイジオ・パッヘ神父が示した勇気の模範、元南山学園理事長アルベルト・ポルト神父が首唱した「Hominis Dignitati=人間の尊厳のために」に感謝し、今後も地域に根ざした、しかも全世

Information

2008年度学生納入金改定について - 授業料、施設設備費とも据え置きを決定

2008年度南山大学学生納入金について、2007年9月28日開催の南山学園理事会は、「入学に際しての宣誓」に示された授業料スライド制をもとに検討した結果、授業料・施設設備費とも改定率を0%といたしました。授業料改定率は、学生一人当り総経費増減率となる人事院勧告による国家公務員給与改定率を合算して算出しております。2008年度の場合、国家公務員給与改定率は0.35%となっておりますが、経済状況等を鑑み、教育・研究条件改善のための改善率を0.35%として授業料を据え置きとしました。施設設備費についても、現状で大学の施設設備取得費および維持経費増には対応可能と判断し、据え置きを決定いたしました。

【名古屋キャンパス学部学生】

授業料を現行の718,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の210,000円に据え置く。

【名古屋キャンパス大学院学生】

ビジネス研究科ビジネス専攻および法務研究科を除く研究科については、授業料を現行の574,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の105,000円に据え置く。

ビジネス研究科ビジネス専攻については、授業料を現行の700,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の100,000円に据え置く。

法務研究科については、授業料を現行の1,000,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の200,000円に据え置く。

【瀬戸キャンパス学部学生】

名古屋キャンパス学部学生の授業料に、総合政策学部は100,000円、数理情報学部は200,000円をそれぞれ加算して算出する。授業料を総合政策学部は現行の818,000円に、数理情報学部は現行の918,000円にそれぞれ据え置く。施設設備費は名古屋キャンパス学部学生と同額とし、両学部とも現行の210,000円に据え置く。

【瀬戸キャンパス大学院学生】

授業料を総合政策研究科は現行の624,000円(社会人学生は654,000円)に、数理情報研究科は現行の674,000円(社会人学生は734,000円)にそれぞれ据え置く。施設設備費は名古屋キャンパスのビジネス研究科ビジネス専攻および法務研究科を除く研究科と同額とし、両研究科とも現行の105,000円に据え置く。

(総務部)

南山大学・豊田工業大学連携講演会

本学と大学間連携協定を締結している豊田工業大学との第2回連携講演会が10月21日開催された。今回は統一テーマを「環境」とし、本学からは、丸山雅夫法科大学院教授/総務・将来構想担当副学長が「法制度は環境の味方になれるか?」、豊田工業大学からは、山口真史大学院工学研究科教授が「未来を拓く環境にやさしい太陽電池」と題した講演を行った。会場には、開演前早から足を運ばれ、また講演後には、数多くの質問が出るなど、「環境」への関心の高さがうかがえる講演会となった。両校は、来年度も連携講演会を実施する予定である。



講演に先立ち、会場校を代表して挨拶するマルクス学長

寄付者ご芳名

「南山大学教育・研究支援」へのご協力に感謝いたします。

- 南山大学同窓会 様
- 野村 健司 様
- 中川 敏雄 様
- 坂下 昭雄 様
- 山口 光大 様
- 足立 信彦 様
- 市川 五十二 様(樹木)
- 原山 清秀 様
- 石黒 範雄 様
- 他1名様



南山大学

発行 学長室
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
Phone: 052-832-3113(直通)
E-mail: gaku-koho@nanzan.ac.jp
http://www.nanzan-u.ac.jp/

南山大学広報誌

NANZAN bulletin vol.163 2007.12.20



NANZAN UNIVERSITY

特集

FEATURE ARTICLE

南山学園創立75周年 記念事業



記念ミサ

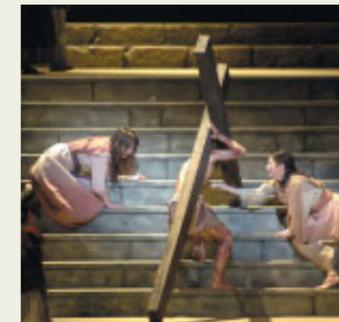
2007年11月1日、南山教会において、カトリック司祭による記念ミサが行われた。ミサには、南山学園の各学校の代表学生・生徒・教職員のほか、学園に縁のある多数の方が出席され、ヨゼフ・ライネルス神父をはじめとし、旧制南山中学校創立(1932年)から今日まで南山学園の発展にご尽力くださった先人たちへの感謝の祈りが捧げられた。



記念フェスティバル

2007年11月18日午後1時より、創立75周年記念フェスティバル宗教劇「受難」が上演された。1963年に始まり今年で41回目を迎える宗教劇「受難」は、例年南山大学初代学長の名前を冠したパッヘ・スクエアと呼ばれる屋外のグリーンエリア(名古屋キャンパス)で上演されている野外劇であるが、今年は、創立75周年記念事業の一つとして、会場を愛知県芸術劇場大ホールという大舞台に移し上演された。

そもそも野外宗教劇は、今から44年前に一学生の提案で始まったが、今や本学を代表する伝統行事となり、キリストのエルサレム入城から十字架上の死を経て復活までを、大学公認の課外活動団体「野外宗教劇」部員である学生達が



上演する。また、単に演じるだけでなく、脚本の執筆やキャスティングから、衣装、メイク、演出、それにポスターやパンフレットの製作まで、あらゆることを学生自らが担当し、その伝統は先輩から後輩に引き継がれてきている。

記念誌

2007年11月1日、南山学園創立から今日までの歴史を1冊にまとめた「HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立75周年記念誌」が学園関係者の編纂のもと、刊行された。

申込方法
郵便番号、住所、氏名、電話番号、南山学園との関係(例:卒業生)を明記の上、切手450円分(郵送実費)を添えてお申込ください。
申込先
〒466-0838 名古屋市昭和区五軒家町6番地 南山学園 学園史料室
ご注意
数に限りがありますので、お早めにお申込ください。またお一人につき一部に限定させていただきます。

Special events

第35回「父母の集い」開催

9月29日、名古屋、瀬戸両キャンパスにおいて第35回父母の集いが開催された。土曜日の小雨の降るあいにくの天気の中、名古屋キャンパス(NNC)約580名、瀬戸キャンパス(NSC)約250名ものご父母に参加をいただいた。両キャンパスの全体会で挨拶に立ったマルクス学長は、「教育には大学と家庭の連携が重要」と、父母の集い開催の意義を強調し、阿部博後援会理事長(NNC)、足立信彦後援会副理事長(NSC)の挨拶では、「今日の機会を十分に活用していただきたい」との期待が表明された。挨拶の後、本学担当者による学生生活、海外留学、就職状況の説明があり、引き続きNNCでは、(株)御園座元チーフプロデューサーの村上武男氏による「歌舞伎に魅せられて」と題する講演が行われた。村上氏からは歌舞伎の歴史や役者の系譜、お勤めの演目など、歌舞



伎の魅力を軽妙に語っていただき、好評を博した。全体会に引き続き、学科懇談会、教員との個別面談、施設見学などが行われ、こちらにも多くのご父母の参加をいただいた。なお、当日ご父母の皆様からいただいたご意見については、今後のより良い大学運営に生かしていきたい。(総務課・瀬戸キャンパス第1課)

一日体験入学会開催

10月8日、名古屋・瀬戸両キャンパス(以下、それぞれNNC、NSC)において、一日体験入学会が開催された。オープンキャンパスとは異なり、祝日にはあるが授業日の月曜日に来学してもらい、在学生対象に行われている通常の授業に参加することで、南山大学の学生生活そのものを体験してもらおう企画である。また、受験生にとっては南山大学を体験できる受験前最後の機会であり、NNCには450名、NSCには108名の参加者を迎えることができた。当日は、開会式のあと、それぞれが事前に希望した学部学科の授業に参加し、高校の授業とは異なった参加型や一味違った専門的な授業を体験し、南山大学に入学したイメージを膨らませるとともに、全学部学科で行われた説明会に参加した。アンケートによると、「ネイティ



ブの人たちとたくさんお話ができて楽しかった。」「南山大生に早くなりた。い。」などの前向きな意見がある反面、中には「難しくてよく分からなかった。」と大学の教育レベルの高さに戸惑う参加者もあった。保護者を含む参加者は、この日の体験から多くの印象を胸に南山大学を後にしたところ。 (入試広報委員会委員長 沢登 文治)

NANZAN FESTIVAL 2007

11月1日～4日、名古屋キャンパスにおいて、NANZAN FESTIVAL 2007が開催された。今年のテーマは「will」。未来を創り上げる意志(will)で未来志向な大学祭を目指そうという想いのもと、学生同士が積極的に協力し盛り上げた。



第1回名古屋アメリカ研究夏期セミナー(NASSS 2007)

「日本私立学校振興・共済事業団 私立大学等経常費補助金特別補助採択事業」

7月28日から4日間、名古屋キャンパスと南山学園研修センターにおいて「名古屋アメリカ研究夏期セミナー(Nagoya American Studies Summer Seminars、通称NASSS)」を国際交流基金日米センターの共催、愛知県教育委員会・名古屋市教育局委員会の後援を得て開催しました。



NASSSは1950年、敗戦直後の日米関係の修復という国家的事業として、東京大学とスタンフォード大学の共同セミナーとして開始され、以来、第1次京都セミナー(京都大学・同志社大学)、札幌クール・セミナー(北海道大学)、第2次京都セミナー(立命館大学)と戦後60年近くわたって開催されてきました。そしてこの伝統のある夏期セミナーが、今年度より5年間にわたって名古屋で開催されるに当たり、本学が主催幹事校の榮譽を担うことになったものです。

今年度は、「アメリカと諸宗教(America and Religions)」を年次テーマとして開催し、日本全国のみならず、アメリカ・韓国・中国・フィリピン・オーストラリアなどアジア・太平洋諸国からも著名学者と大学院生、そして地元一般市民の皆様も含め、総計300名のご参集を得て、好評のうちに終えることができました。

特に今回のNASSSでは、先に設立されたNASSS準備委員会(後に実行委員会と改称)において、半世紀以上にわたって積み重ねられた「専門家会議」としての伝統を受け継ぎ発展させつつ、新たな社会貢献をも試みようという意見の集積がなされたことから、「市民向けセミナー(初年度

は全体会を同時通訳つきで一般公開して代替)」と「国際大学院生セミナー」という新機軸の企画が加えられました。これらの取組みを通じ、地元社会への貢献、将来の「地球社会」に備えるべく問題共有と解決のための共同の努力、そして共有されるべき価値観と倫理構築に向けた国際的リーダー育成への貢献を目指します。

NASSS開催にあたって、アイシン精機(株)、興和(株)、(株)サイマル・インターナショナル、シャチハタ(株)、中部電力(株)、(株)デンソー、東海旅客鉄道(株)、トヨタ自動車(株)、(株)豊田自動織機、豊田通商(株)、名港海運(株)の各社(50音順)、そして財団法人アメリカ研究振興会、在名古屋アメリカ領事館・名古屋アメリカンセンター、財団法人渋沢栄一記念財団、財団法人東海テレビ国際基金、日米教育委員会(フルブライト委員会)、日米友好基金、米日財団(50音順)といった内外の諸財団のご援助を賜りました。改めて感謝申し上げますとともに、引き続きご支援を心よりお願い申し上げます。(アメリカ研究センター長・NASSS事務局長 川島 正樹)



今後4年間のテーマ

2008年	多様な視線からのアメリカ研究 -ジェンダーと比較研究-
2009年	アメリカニズムと社会の公正
2010年	記憶の共有のために -歴史認識の差をどう埋めるか(予定)-
2011年	グローバル化とアメリカ研究の行方(予定)

南山大学 歴代学長紹介 3

本年度、南山学園の創立75周年を迎えるにあたり、これまでの大学の歩みを歴代の学長とともに振り返ります。

3代目学長 ヨハネス・ヒルシュマイヤー 神父

1972年より3代目学長に就任したヨハネス・ヒルシュマイヤー経営学部教授は、創立以来の「キリスト教的」学術的「伝統を継承するとともに、南山大学の国際化を推進、発展させました。対外的に南山の独自性が広く知られるようになり、学部だけでなく大学院の充実期を迎えたのもこの時期です。72年の文学研究科仏文学専攻博士課程の設置にはじまり、経営学研究科経営学専攻、文学研究科独文学専攻、神学専攻にそれぞれ博士後期課程が増設され、学部・大学院とも充実した中部地区有数の文系総合大学としての地位を確立しました。

82年には南山学園創立50周年を迎え、南山大学「国際化プロジェクト」を発足。その当時は最新の設備を持つLL教室、同時通訳の養成にも使用できる視聴覚特別教室、視聴覚ライブラリーなどが設置されたL棟を開設し、視聴覚教育を拡充させるとともに、帰国生徒の受け入れ体制を整備しました。さらに中部地区初となる外国人留学生別科の設立や海外の大学と学生交換協定の締結など、より一層の国際化が推進されました。とりわけ留学生別科は、設置直後よりアメリカをはじめとした諸外国の大学・研究機関から積極的な関心が寄せられ、南山大学の名を世界に示すものとなりました。



ヨハネス・ヒルシュマイヤー神父
1921年10月28日生まれ
在任期間:1972年 - 1983年
所属:経営学部経営学科

Campus Topics

“Nagoya Castle”Field Trip with Undergraduate Students

PETKOVIC, Tijana
(外国人留学生別科IJ500)

私は南山大学外国人留学生別科のIJ500というクラスで日本語を勉強している留学生です。日本文化や伝統に興味をもっている私は、大学の時から何よりも日本に来たいという願望を持っていました。そしてついにその願いをかなえることができました。

今年の9月に初めて来日したのは、日本の伝統に初めてふれたのは、南山大学のCJSオフィスで企画されたフィールドトリップで名古屋城に行ったときです。名古屋城、それは、美しい公園で囲まれた昔の名古屋の象徴です。

外から見ると、尊大で本物に見えます。城の上にある有名な金鯱に、観光客は見下ろされています。ところが、城の中に入ったら、現在と伝統の混合物のような不思議な光景にびっくりしました。当時の名古屋城にはエレベーターがあるはずがなく、少し裏切られたような気がしましたが、城の上に登ると、外の景色はとて素晴らしい、すぐに裏切られた気持ちがなくなりました。各階にはよく切れる刀、危ない短刀、恐ろしい軍隊のよろい、ふすまに上手に書かれている書道があり、それを見て楽しみました。

私が名古屋城の中で大好きな階は古い道の復元がある階です。その階には昔の本屋さん、武器屋さんなどが並んでいて、そのお店の中はランタ



ンの灯に明るく照らされていました。ところが歩いていて、いきなり、真っ暗になりました。そのときには、「停電に違いない」と思ったのですが、昔の名古屋の夕方のシミュレーションだとすぐに気がつきました。本当に昔の日本にいるような雰囲気です。とても素晴らしい経験でした。

名古屋城は名古屋の象徴だけでなく、歴史の証拠の博物館として、みやげを買わずに帰ることはできません。だから、国の家族や大勢の友達に色々なものを買ってきました。そして、日本で体験したことを毎日のように話してあげたいと思っています。名古屋城のフィールドトリップはその中でもとっておきの話になるでしょう。

国には国の伝統があるということがありますが、私は日本にいるうちに、できるだけ様々な日本のな所に行って、現在と昔の日本と出会うつもりです。



IJ500 = 外国人留学生別科必修科目
「Intensive Japanese」レベル500

International Friendship

繋がりの実り-NAPベトナム-

宮崎 潤
(総合政策学部総合政策学科3年)

2007年2月、バイクのクラクションとオレンジの街灯に包まれた街のノイズに降り立った。1ヶ月間で何を学ぶことができるのか。ベトナムNAPに参加した私達20人は期待と不安でとても緊張していた。NAPとは1ヶ月間アジア諸国に行き、現地でその国の文化を知り、言語を習得する短期留学プログラムである。

大学の講義では、午前中にベトナム語の文法・構文の授業を受け、午後にはベトナム人チューターと触れ合うことで日常会話の習得を目指した。実際に、現地の方々と言葉のキャッチボールをしていくうちに、言葉以上のものが伝わってくるのを感じた。ベトナム語には6つの声調があり、私の発音は未熟でも多くの子供たちが笑いかけてくれた。しかし、目を見て真剣に耳を傾けてくれる彼らの姿勢は、私の心にとて温かいものを伝えてくれた。そして、他言語を学ぶことの難しさを知ると同時に、言葉を用いずとも気持ちの受け渡しが可能であると改めて実感した。



また、私が好きだったことは、街を歩くことだ。街の喧騒や食べ物と排気ガスのおいなかで、人々の生活を肌で感じながら、ひたすら歩いて多くの風景を見た。早朝5時には道端に幾つもの屋台が出ていて、ベトナム人の多くが外で朝食をとる。午前中のみ営業する道端の散髪屋や、機関銃を持って湖の警備をする軍人の姿は私を驚かせた。立ち並ぶ細長い家々の玄關からは、なかの様子が丸見えでそこにいる家族と頻繁に目が合った。一瞬、気まずい感じがするけれども、多くの子供たちが笑いかけてくれた。そして、少し足を伸ばして見に行った、デルタに広がる田園の一面の緑を、私は決して忘れない。多くのことを学んだ日々から8ヵ月後、私は再びハノイを訪れた。大好きなチューターのみんな、また、9月から1年間の留学に旅立った友人に会うために。季節は春から秋に変わり、街には新たなビルが建設されていたが、彼らの笑顔は変わっていなかった。久しぶりに会う友人たちとベトナム語で会話をしてみたが、やはり、スムーズに伝わってはいないようであった(笑)。

たわわに実った稲穂のように、これから私達の友情を育てていきたい。

日韓間の国際私法

青木 清

あおき・きよし

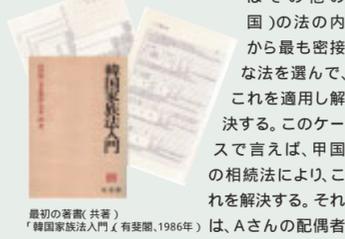
法学部法律学科教授



専攻分野は「国際私法」「韓国法」。長期研究テーマは「日韓渉外私法」。近著は「渉外私法リスクリメント」(共著、2007年)など。担当科目は「国際私法」など。

「私の研究」を紹介する前に、私の専攻分野である国際私法のお話を、まずはさせていただきます。例えば、日本に住んでいる甲国籍の外国人Aさんが日本で死亡し、日本においてその相続問題が発生したとする。ここでは、当然、誰が相続人となるか。さらには、その相続分はどれくらいか、といったことが問題となる。日本人が死亡してその相続が問題となれば、これらはいずれも日本の相続法によって解決されることになる。ここでポイントのは、死んだ人が日本人ではなくて、甲国人だったということである。つまり、外国人がその法律問題に関わっているという点にある。

こうした場合、わが国の法制度は、当該法律問題に関係する諸国(甲国や日本、さらにはその他の国)の法の内から最も密接な法を選んで、これを適用し解決する。このケースで言えば、甲国の相続法により、これを解決する。それ



最初の著書(共著)
「韓国家族法入門」(有斐閣、1986年)は、Aさんの配偶者

や子どもたちすべてが日本人であっても同様である。要するに、外国人が関わる相続については、亡くなった人の国籍国の相続法によってこれを解決する、というのわが国のルールである。この種のルールを定めているのが、私の専攻する国際私法という法分野である。法律の名を「法の適用に関する通則法」という。関係諸国の法の適用に関する通則法」という。関係諸国の法の中から最も適切な法を選んで適用し解決する、という構造は、何も相続問題に限らない。その他の事件でも、さらには関係者の国籍国がどこであっても、基本的には同じである。

私は、こうした国際私法上の問題のうち、日本と韓国の間で生ずる法律問題を研究している。それは、日本に住む外国人の中では、圧倒的に韓国人が多いからである。そして、上記国際私法の構造から、日本の裁判所ではしばしば韓国法の適用が問題となる。このため、私は、国際私法固有の問題とともに、韓国法固有の問題も研究している。というのも、このような状況があるにもかかわらず、わが国には、韓国法を本格的に研究する者が極めて少ない(私が院生の頃まではほとんどいなかった)からである。

Intermediate English Skills

山岸 敬和

やまぎし・たかかず

外国語学部英米学科講師



専攻分野は「政治学」「アメリカの政治」「公共政策」。長期研究テーマは「アメリカの政治制度の発展」。担当科目は「アメリカの政治」「政治学研究の基礎(アメリカ)」「アメリカ政治特講(アメリカ大統領制)」「Special Topics in English」など。

私が担当するIntermediate English Skillsというクラスは、英米学科の学生が1,2年次に習得した英語の「読む、書く、聞く、話す」という能力をさらに向上させるために設けられた。3,4年次生対象に英語のみで行われる科目です。この科目を担当するにあたってどのような内容にしようかと考えた時に、私自身が9年間のアメリカ留学中に経験したことを思い出しました。私の専門はアメリカ政治で、「アメリカ政治については一般のアメリカ人より語るの?」と思っていました。しかし、アメリカ人から聞かれるのは日本に関することばかりです。理由は簡単、私が日本人だからです。そしてそのとき初めて私が日本のことをうまく英語で説明できないことに気づきました。このような経験から私はクラスの目標を、日本の歴史・社会・政治を英語で説明し議論できるようになることとしました。授業は二部構成で前半は学生数人が最近の日本での



出来事について発表し全体で討論を行います。後半は日本の政治史に関する学術論文について全体で議論します。そして、このクラスをさらに面白くしているのは、留学生別科の学生が参加できるようになっていることです。今年はアメリカ人学生が三人参加しています。留学生は「日本には、何のためにすごいのコンピニと自動販売機があるの?」というような、日本に住んでいる私たちが疑問にも思わないことを出身国と比べながら質問したりします。留学生の参加によって、日本人学生は英語力を向上させられるだけでなく、日本にいながら比較的視点で日本をみる訓練ができるのです。

学生のうちに国際性を身につけることの重要性が叫ばれて久しいですが、そのためには外国のことについて学ぶということに加えて、日本について外国語で発信できるということが重要になります。外国で尊敬されるのは、これらの両方ができる人なのです。私のクラスが、学生の英語を上達させるだけでなく、このような学生を南山大学に増やすことに貢献できれば、と願っています。